

千里ニュータウン情報館「ニュータウンを読む」展
関連オンラインセミナー

「発掘！私がオススメのニュータウン本大会」第2回

2023年3月22日(水)19:30-21:00

お話:

五月女賢司さん(大阪国際大学国際教養学部准教授)

鈴木毅さん(近畿大学建築学部教授)

田中悠紀さん(豊中市立千里図書館司書)

牧瀬智子さん(吹田市立千里図書館館長)

進行:奥居武(千里パブリックデザイン)

奥居(進行)

きょうはお集まりいただき、ありがとうございます。今回は「発掘！私がオススメのニュータウン本大会」の2回目となります。このセミナーは完全オンラインでお届けしています。きょうは海外からもご参加いただいています。

進行を務めますのは、千里パブリックデザインの奥居です。千里ニュータウンで育ち、千里に越してきてから来年で60年となります。どうぞよろしくお願ひします。

きょうお話いただく4名のパネラーをご紹介します。五十音順で、最初は五月女賢司さん。大阪国際大学国際教養学部准教授でいらっしゃいます。昨年春までは吹田市立博物館で近現代担当の学芸員をしておられ、万博やニュータウンなど吹田の現代をテーマに多くの展示企画をしてこられました。

お2人目は、鈴木毅さん。近畿大学建築学部教授で「千里ニュータウン研究・情報センター(ディスカバー千里)」の共同代表も務めておられます。建築の中でも、人がある場所でどう豊かに居られるのかという観点から、研究と活動しておられます。

3人目と4人目は、千里ニュータウンを構成する両市の図書館からお越しいただいております。両市には「千里図書館」という同じ名前の図書館が吹田市では南千里駅前の千里ニュータウンプラザに、豊中市では千里中央のコラボの中にあります。昨年11月には北千里駅前にあった図書館の分室が北千里図書館となり、3つ目の市立図書館ができました。千里は昔から図書館の利用が大変活発な地域であると聞いています。田中悠紀さんは、豊中市立千里図書館からご参加いただきます。牧瀬智子さんは、吹田市立千里図書館の館長さんでいらっしゃいます。きょうはこの豪華メンバーと一緒に、「読む資料」を入口に千里ニュータウンやその他のニュータウンを多彩に切り取っていきたいと思います。

パネラーからの資料紹介

奥居

それではご紹介いただく本の内容から構成して、まず鈴木さんからお願いします。

鈴木

鈴木です。近畿大学の建築学部におりまして、建築にはいろんな分野があるんですが、建築計画という分野で。デザインする前に何を作ればいいのかを考えるのが建築計画です。これからの町にどんなものがあればいいか、どんな施設、どんな場所があればいいかを考えております。

ニュータウンがわかりやすいですが、昔だったら住宅を作って小学校を作ってで済んでいたんですが、今はもっといろんなものが必要になってますね。高齢者施設や子どものための施設であるとか。そういうものを、これからどうなるかというのを考えています。

図書館の方もいらっしゃるので宣伝ではないですが、最近一番気になっているのは「みんなの図書館さんかく」 (<https://www.sancacu.com/>) というシェア型のライブラリー。焼津市で始まった活動で、すごく面白くて可能性を感じています。3月3日の3周年に焼津に行って見てきました。

私は「ディスカバー千里」 (<https://discover-senri.com/>) という地域活動をやっておりますが、そこでは千里の昔の思い出や記憶などを発掘し、研究を行っています。

さて、私がきょうご紹介したいのは、『ほっとかない郊外 ニュータウンを次世代につなぐ』。ニュータウンの今とこれからについて、建築計画の立場から紹介しておきたい本です。泉北ほっとかない郊外編集委員会が出しています。

泉北ニュータウンは、千里ニュータウンより5年遅れて入居が始まった堺市の南区にあるニュータウンです。この本のサブタイトルは「ニュータウンを次世代につなぐ」。泉北でいろんな工夫をされていることが載っています。非常にわかりやすい本で、6章構成になっていて、順に「食卓ができた」「居場所ができた」「健康になった」「楽しみができた」「リノベができた」「役割ができた」となっています。ニュータウンの課題に対して、こういうことができたという事例を順番に紹介しています。

最初の扉の写真には「ずっと安心して住み続けたい。でも徒歩圏には食事ができる場所がない…」だから食卓を作ったと。次は「買い物に出られなくて、インスタントの食べ物に頼ってばかり」いたけれど、そうならないようにまちの食卓を作った。次は「今の家では家族に迷惑をかけてしまう。でも施設では自由に過ごせない」ということで、高齢者のための居場所を作ったと。そのほか「外出がしんどいけど、歩くきっかけになるものを作って健康になった」「定年退職後、遊びに行く場所がなく友達がいないということで、第3の居場所を作った」「子どもが独立して部屋が余ってしまっているのに、リノベをしてシェアハウスにした」「ニュータウンには仕事がなく、お店を作りにくいが何とか頑張って役割を作った」など、いろんなニュータウンにも共通する課題があると思うんですが、それに対してアクションを起こして6つに分けてやっている。非常にわかりやすい紹介になっています。

泉北ニュータウンは、3つの地区にエリアが分かれています。千里ニュータウンはグリーンベルトに囲まれて閉じた感じですが、泉北は既存の住宅エリアと入り組んでいるので、すぐ外に自然があるんですね。田畑とか。それが今の時代になって良い方向になって

●『ほっとかない郊外—ニュータウンを次世代につなぐ』
泉北ほっとかない郊外編集委員会 大阪公立大学共同出版会 2017
→ 鈴木毅さんからのご紹介

います。ライフスタイルと自然が近いところに住める。今回のリノベもそれがうまくいっている感じなんです。

「槇塚台レストラン」は近隣センターに作ったレストランで、大阪市立大学（→大阪公立大学）の学生さんたちがデザインして作った。600円ぐらいで食事を出している。学生と住民と一緒に作っている。夜は居酒屋になって、地域の拠点になっている。

それ以外にも、戸建住宅をデイケアの場所にしたたり、府営住宅を高齢者が一時的に住む場所になっている所も紹介されています。

実際に見学に行って、どういう背景で誰が作ったかがよくわかりました。結論を言うと、大阪市立大学の底力というか。生活科学部で居住環境と福祉と栄養のことを1つの学部でやっている。リーダーの森一彦先生が仕切って多くの人をまとめて、こういうプロジェクトをしている。

同じような課題が千里にもあると思いますが、千里はデベロッパーによる再開発が進んでいるのでなかなか包括的な取り組みまでいかないけど、これから生活のことを考えるリノベーションが非常に重要になってくるんじゃないかと思います。ニュータウンの生活を今後どうしていくか、泉北の具体的な事例がわかりやすく載っている本です。

奥居

ありがとうございました。それでは続いて五月女さん、よろしくお願いします。

五月女

私からは、SF作家の小松左京による『やぶれかぶれ青春記・大阪万博奮闘記』。2つのタイトルが1冊になった、小松左京がなくなってから2018年に出版された文庫本です。

ご紹介したいのは後半の「大阪万博奮闘記」で大阪万博に関連した文章が3つ収められているんですが、そのうちで一番長いのが「ニッポン・七〇年代前夜」。初出が1971年2月。万博が終わって数ヶ月後に小松左京が文藝春秋に書いた文章です。それ以外にも「万国博はもう始まっている」とか。加藤秀俊という社会学者が小松左京の回顧を書いた文章とあわせて、大阪万博絡みが3本立てになっているんですが、そのうちの「七〇年代前夜」を紹介します。

この文章は、当時あった「万国博を考える会」という自主研究会をメインで紹介したルポルタージュです。ノンフィクションみたいなものですね。かなり精度・正確性の高い文章で、私もそうですし一部の70年万博の研究者も参考文献として使うぐらい、当時の舞台裏が細かく記録されています。

昨日、万博研究でお世話になっている橋爪節也先生が大阪大学を定年退職されるということで最終講義に行ってきました。橋爪先生の師匠が山川武先生という美術史専門の方。その山川先生が若い橋爪先生に「老婆心ながらいけど、君の文章は面白いけど踊るようなところを抑制しなさい」と。それから考えると小松左京は踊るようなところがある文章だなと思います。

内容を紹介します。「万国博を考える会」は文明学者、民族学者の梅棹忠夫と社会学者の加藤秀俊。梅棹は当時大阪市立大学の助教授。加藤は当時京都大学人文科学研究所の助

●『やぶれかぶれ青春記・大阪万博奮闘記』
小松左京 新潮文庫 2018
→五月女賢司さんからのご紹介

手だったかな。そして小松左京。SF作家として駆け出しで知られていない頃の小松さんが京大人文研に出入りしていた。この3人が『放送朝日』というABC朝日放送が出していた業界誌の人たちと組んで「万国博を考える会」を作り、万博開催が決まる1年ぐらい前に飲み会の延長みたいな感じであだこうだといろいろ考えていた。そのことが詳述されています。

ルポルタージュなんですけど、小松左京は理論派というか京大出身ですし、学術面の背景も紹介しつつ、なぜ自分たちが万博にのめり込むことになったのかという詳細を書いています。

ちなみに『放送朝日』というのは、梅棹忠夫の有名な論文で「情報産業論」がありますがそれが掲載されたPR雑誌であり、質の高いものとして有名なんです。

この自主研究会の3人が考えた基本理念が、実際の万博にほぼ修正なしで採用された。それが基となって、基本理念をぐっと凝縮させてできたのが「人類の進歩と調和」というあの有名なテーマです。

自主研究会は万博に関連するトピックを幅広く研究していました。たとえば、地元自治体の関連公共事業のこと。オリンピックで東京がだいぶ様変わりしたことを研究会メンバーは知っていたので、これから万博が開催される関西もそうなるんじゃないかという想定のもと、いろいろ研究を重ねていました。今回のイベントは「私がオススメのニュータウン本大会」ということなので、私が紹介する『やぶれかぶれ青春記・大阪万博奮闘記』の中でイベントの趣旨に沿った部分はどこかということ、開催地・千里をはじめとする関西での関連公共事業によって西日本はどんな変貌を遂げるのか、日本の近未来の社会についての小松による語りの部分で、大変興味深いです。ひとまずご紹介を終わります。

奥居

ありがとうございました。続いて豊中市立千里図書館の田中悠紀さん、お願いします。

田中

お二方に比べると初心者向けの内容になりますが、今回、ご紹介したい本は、万博の観客輸送のために開設された北大阪急行についての資料『北大阪急行電鉄の記録』です。大阪府下の図書館では、豊中市立千里図書館しか所蔵していないものです。

皆さんご存じだと思いますが、北大阪急行は大阪万博開幕の3週間前の1970年2月24日に営業を開始。2020年には開業50周年を迎えています。この記録は1971年に出版。開通から万博直後までの北大阪急行の歩みを写真メインで振り返っている資料です。今回は、北大阪急行の歴史をたどる中で私が驚いたこと3つを紹介しつつ、この本の紹介をいたします。楽しんでいただけたら嬉しいです。

許可をいただいたので、中の写真もご紹介します。1つ目は「万国博中央口」という駅があったことが驚きでした。駅のホームが、今の中国吹田ICの上り線の料金所あたりにあったということで、駅の横に自動車がびゅんびゅん通っていたんだと。駅の真正面に太陽の塔が見えるのがいいなと。1回この駅で降りてみたかったなと思いました。

●『北大阪急行電鉄の記録』北大阪急行 1971
→ 田中悠紀さんからのご紹介

「万国博中央口駅」だけではなく、「千里中央駅」も今の場所じゃなくて違う場所にあったということも驚きでした。万博開催中は「(仮設)千里中央駅」だったんですね。ちなみに今の千里中央駅は、万博閉幕の翌日の1970年9月14日開業。当時の写真を見ると、吹き抜けで商店街と地下駅のホームが一体化しているデザインは珍しかったらしく、「未来都市」千里ニュータウンを感じられるようです。

驚きの2つ目が、工期わずか1年半という短さです。江坂駅から桃山台駅、千里中央駅、そして万国博中央口駅までをわずか1年半で作り上げたのはすごいと思います。現在、箕面船場まで延伸工事の真っ最中ですが、当時は今と状況は違うとはいえ圧倒的な早さで驚きました。

この資料には開通式の様子も載っています。当時走っていた電車の姿も載っていますが、銀色一色だと知らなくて、これも良いなと。レトロな感じで見てみたかったです。

3つ目が、万博会期中約4,000万人を輸送したということ。「北大阪急行ご利用乗客数」という表が出ており、約4,000万人という数字は万国博中央口の発着人数だそうです。あまりピンとこないかもしれませんが、万博の総入場者数は約6,400万人、うち北大阪急行で来場したのは約2,400万人。来場者の37.9%の人が利用したということ（『日本万国博覧会公式記録 第2巻』）。

この資料ではないのですが『北大阪急行の25年史』によりますと、連日20～40万人が訪れて2分30秒間隔で運行したけれど、すし詰め状態で電車が到着するたびに人で溢れかえっていたと。ピークには最終電車が発車しても、取り残された人が約10万人いたと書いてあって、今では考えられないなと驚きでした。

当時の駅の様子も少し写真で載っています。人・人・人という感じで、当時の熱気を感じられます。

北大阪急行の開業が千里ニュータウンにもたらしたものは大きいなと思っていて、当時ニュータウンの鉄道としては阪急千里線があり吹田市域住民の足になっていたと思います。豊中市域住民としてはまだモノレールもないし、おもに徒歩やバス、自家用車を駆使しておられたのではないかと思います。それが万国博中央口から梅田まで24分、当時の値段で110円で行けるようになった。

ちなみに2017年5月30日の日本経済新聞の記事によると、当時の運賃としては地下鉄や阪急電鉄に比べても同水準だったけれど、現在でも初乗り運賃100円という日本屈指の安さを継続している背景には、大盛況だった大阪万博と沿線地域の発展があったと。その後の1982年の調査でも、千里中央を訪れる人の交通手段は平日休日ともに北大阪急行が一番多いという結果が『千里中央地区将来構想』に出ています。住宅だけでなく商業の中心地として千里ニュータウンが発展していく一助になったのではないかと思います。

「万博後の未来編」として「エキスポへの夢を乗せて走った北大阪急行は、未来都市を作る人々の足として働きます」と書いていますが、まさに千里ニュータウンの大動脈になっていったのではないかと思います。

今回いろいろと北大阪急行のことを調べさせてもらい、ニュータウンのこともいろいろと調べました。毎日、千里中央に通っていますがニュータウンの歴史を知ると見えてくる景色も少し変わって面白いなと思いました。北大阪急行は何気なく普段乗っていました

が、今回をきっかけに見る目が変わりました。あんな大変な時代があったんだねと感慨深い気持ちで乗れそうです。

豊中市立千里図書館では、千里ニュータウンの関連資料や1970年の大阪万博の資料をたくさん集めております。図書館の一角にそのコーナーもありますので、ご興味ある方はぜひ一度お越しください。

奥居

ありがとうございました。千里コラボの図書館に行かないと見られないという貴重な本をご紹介します。続いて、吹田市立千里図書館の牧瀬さんからお願いします。

牧瀬

千里ニュータウン、吹田の青山台で長年にわたって家庭文庫を主催されてきた正置友子さんの本をご紹介します。『絵本の散歩道』シリーズという5冊の本です。

●『おかあさん、ごはんと本とどっちがすき』正置友子
創元社 1982（他全5冊）
→ 牧瀬智子さんからのご紹介

『おかあさん、ごはんと本とどっちがすき』

『おかあさん、本よんで』

『絵本という宝物』

『絵本のある暮らし』

『絵本があって花があって』

著者の正置先生は名古屋市のお生まれ。1965年にご結婚後、千里ニュータウンに入居されました。1973年にご自宅を開放し、家庭文庫「青山台文庫」を始められました。

ご利用された方いらっしゃるでしょうか。家庭文庫は個人やグループがご自宅や団地の集会所などを活用して地域の子どもたちへの本の貸し出しや読み聞かせ、お話し会などを行う、ボランティアで活動している図書館の施設です。

このように紹介すると正置さんは子どもや本が大好きだと思われそうですが、ご自身は子どもが苦手な引込み思案だったそうです。正置さんは小学校5年生の頃に突然「なぜ私は生きているのだろう」という思いにとらわれて、人に会うことや話すことが本当につらくなっていました。

その答えを求めて本の世界に没頭され、ふと児童文学の本を読んで「なぜ生きているのだろう」と考え続けることが生きていることであると気づいて、そこで初めて「生きていてもいいんだ」と思うことができたそうです。生身の人間の友達はできないのではと思っていたそうですが、ご自分が感動した児童文学を千里ニュータウンの周囲のお母さんたちにも読んでもらいたいという気持ちが募って家庭文庫を始められました。そこへ思いもよらないほどのたくさんの子どもたちやお母さんたちがあふれんばかりになり、正置さんを支えているんなことを教えてくれたといいます。

おかげで正置さんはご自分が社会の一員であること。人と人が互いに支え合って生きているということを学んで、「家庭文庫はまさに私の学校だった」とおっしゃっています。

引込み思案だった一人の女性のその後の活躍ぶりは、1981年から1986年に北千里地区公民館の初代館長になりました。1994年にはイギリス留学。2001年ヴィクトリア朝の絵本の研究で博士号を取得。その後、聖和大学の教授に迎えられ、2007年には国際児童文学学会で実行委員長を務められました。そのように日本中、世界中の子どもの本を愛する人と繋がって、現在も青山台にお住まいでお元気に文庫活動や絵本の研究を続けられています。現在「青山台文庫」はご自宅ではなく団地の集会所に移っています。昨年11月に吹田市立の図書館では一番新しい北千里図書館が開館した時には「生きるための絵本」という開館記念講演をしてくださっています。

この5冊の本は、地域新聞の「千里タイムズ」に15年間にわたって連載された「絵本の散歩道」という記事を本にしたものです。家庭文庫の活動だけでなく、子育てや地域に住む人たちとのふれあい、公民館長や研究者としての奮闘の日々を綴っておられます。毎回コラムの後で絵本の紹介をされていますので、絵本のガイドブックにもなっています。

正置さんは千里ニュータウンという町に初めはなじめなかったとおっしゃっています。

「夕暮れ、千里に帰ってきた私の中には「あー帰ってきた。やっぱり千里はいいなあ」というしみじみした柔らかい気持ちは少しも湧いてこない。四方八方コンクリートだらけでコンクリートの塊に押しつぶされそうな気がする。でも日本中がコンクリート化してあっておりそこから逃げることはできない。だから団地の中の草や木々がたまらなく愛おしい。千里ニュータウンは3人の子どもたちが生まれ育ってきたところ。たくさん子どもたちがお母さんたちに出会ったところ。そこにコンクリートの土台を突き破るほどの根をみんなで張っていけたらと思うようになった。団地という所は大人にとっては転勤先、マイホームへの足掛かりの場かもしれないが、子どもたちにとっては今この1秒1秒を生きている場所。私たち大人は根を張る土壌をこしらえてやる義務がある」とあります。

正置さんはニュータウンに住まれて、草木のことを繰り返し愛おしんでおられます。ナンキンハゼという木をご存じでしょうか。その木が好きで何度も書いておられます。千里ニュータウン情報館によりますと、まちの個性を際立たせるためにニュータウンの街路樹は町ごとに違う種類の木が植えられていると。正置さんが住む青山台はナンキンハゼの木を植えているということです。

1981年、正置さんは「千里の木々が千里に根付き美しくなるのに十数年の年月を要しました。自然をなぎ倒して立ち現れた人工の町に住み始めて16年。白いコンクリートの町があんなに嫌いだったのに、めぐりくる秋のナンキンハゼの木の彩りに心踊らせるようになって、いつの間にかこの町がわが町となっていることを最近深く感じるようになりました。」というコラムを書いておられます。

この回では『もりのかくれんぼう』（作：末吉暁子、絵：林明子）という絵本が紹介されています。家の近くの不思議な金色の森に迷い込んだ女の子が、そこに住む動物たちと楽しく遊んでいて、ふと気がつく自分が住む団地に戻っていた。女の子は団地ができる前そこは大きな森だったということを聞くお話です。

正置さんは「千里もかつては雑木林だったと知ることが大切ですが、これからの千里の町を千里の子どもたちとともに育んでいきたいと切に思います。」と書かれています。

千里ニュータウンの誕生と一緒に越してこられて、子どもたちと自然の成長を見つめてきた正置さんのこの5冊は、そのまま千里ニュータウンの温かくて力強い生活史になっていると思います。ぜひ手に取ってご覧いただきたいと思います。

奥居

ありがとうございました。この本は現在買うことは難しくなっていますが、吹田市立千里図書館には所蔵されています。青山台文庫は今年で50年になるんですね。

4名の方から角度の違う千里に関わる本をご紹介いただきました。それでは、もう少しお話を深めていきたいと思います。鈴木先生、泉北ニュータウンは同じ大阪府が造った千里の弟分とも言われますが、泉北と千里を両方見てお感じになることはありますか？

鈴木

そうですね。やはり条件や状況が違う。年代が5年ずれているだけでなく。千里は再開発、建替が成立しやすい。成立しているからこれだけ建て替わっているわけです。

「ディスカバー千里」の太田博一さんと話していて泉北も府営とか少しは動いてるみたいだけどあまり建替は起こってないんですね。まだ活発じゃない。だからこそ泉北はいろんな工夫をしているように見えますね。

堺市の人は「千里の真似はしない」と。千里はデベロッパー任せだからと。われわれはリノベーションとか作って終わりじゃないだろうという認識でいますので、今あるものをどうやってうまく使うか。ただのベッドタウンじゃなく、働く場を作る方向に世の中全体が動いていると思いますが、それを実践している点では泉北は工夫が進んでいるように僕には見えますね。条件が厳しいからこそみんな一生懸命いろんな工夫をする理由があって、いろいろ進んでいるように見えます。

ただ、同じ課題をたとえば千里の高齢者とか子どもたちも持っているはずなので、そのあたりは考えていかないといけない。

大阪市立大学の生活科学部は生活をダイレクトに扱う。食べることと、居住環境、住宅と福祉の3つをちゃんとカバーできる専門家がいたから、レストランとかがきちんとプロの目で作られている。そこがちょっとうらやましい。僕の前任校が阪大でしたが、バリアフリーだけで福祉と言っちゃうような状況だった。大阪市立大学の伝統が生かされてリノベーションが建築工学系だけでなくできているのは、うらやましい感じがします。

奥居

生活に入り込んでニュータウンをこれからどうしていくかを考えるというトライアルが泉北では行われているということですね。千里と泉北では不動産の状況、条件も違いますが、千里でも泉北の取り組みはおおいに参考にすることがあるんじゃないかと。

鈴木

生活はどこでも大事だと思います。建替が成立するのはもちろん良いことなんですけど、ついでにもうちょっと今後の生活に向けて、みんなで食べるところや子ども食堂とかを入れていくべきだったんじゃないかと思ったりします。

奥居

そうですね。同じ「ニュータウン再生」と言っても千里と泉北では町の条件が違うので、違う町の話だと思ってしまうがちですが、お互いに交流しながら参考にできるところは取り入れていくことが必要なのではないかと私も思います。

五月女さん、70年の万博前夜にどうやって万博を实のあるものにしていくかという葛藤の記録が「大阪万博奮闘記」ですが、2025年まであと2年。万博を控えている状況でこの本を読むとまた面白い。その趣旨で2018年に文庫化されていると思います。2025年前夜と1970年前夜を比べるという観点でも取り上げていただいたのでしょうか？

五月女

奥居さんが僕の研究室に来て「これどうだ」と（笑）。僕が万博研究をしていたのは2025年万博云々ではなくて、2025年の話は影も形もなかった頃から研究をしていました。研究をしている人間として目の前で実際に万博が開催されるのは、非常に大きな関心にはなっていますね。

今当時のことを面白く読んで、今だったらどうなんだろうとか当てはめつつ楽しむことは可能かなと思います。社会背景が当時とは違うので、2025年万博に実際に生きるかというのとは別問題で、すぐに生かすというものでもない。

この本は「万国博を考える会」が中心となって書かれています。2年後に万博が迫っている今の段階でいうと、もはやその段階ではないんですね。理念やテーマ、コンセプトが決まって、それにもとづいて動き始めている段階なので。今の動きを重ねながら読む楽しさはあるかなと思います。

鈴木

「考える会」みたいなゆるやかなネットワークというか文化人というか、そういうものが今はないのかなという気がします。当時の作家も学者も入ってというものが。

五月女さん、僕は小松左京の公式ファンクラブに入っていたし、小松左京研究会にも入っていた身の意見としては、小松さんが「まだかけ出し」というのはどうなのでしょう？ 当時はすでに『復活の日』と『果てしなき流れの果てに』を書いていたので、それは代表作と言っていい。SF作家としてはかなり成功してたんじゃないかな。

五月女

それは本人が文章の中で書いているんです。引用しますと、236ページ「しかし、昭和39年のその時点において、私はようやくいくつかの単行本も出て、すこし生業が安定しかけたばかりの、いわばまだかけ出しの物書きであり」という文章にもとづいてさきほどの表現にしました。

鈴木

ご本人が言ってるならいいですが、歴史から見ると代表作が出てるからと思って。すみません。

奥居

鈴木先生はファンクラブに？

鈴木

小松左京研究会に。ご本人にお会いしたこともあります。筒井康隆のファンクラブにも入っていました。

奥居

私も吹田市立博物館などでお会いしたことがあります。愉快で鋭い方でした。

この本が書かれた当時は、万博が政財界の思惑だったり、地元住民はどうするんだ、学者はどう向き合うのかとか、いろんな角度から思惑が交錯していた一方で、小松さんたちは万博があろうとなかろうと未来を考えていた時に、本当に万博をやることになってしまった。

2025年にも重なる点がありますが、当時、千里丘陵の裏側でこういったエネルギーのやり取りがあったことをうかがえる一冊だと思います。

現実に進んでいく万博に対して、学者は学者の世界があって、小松左京はブレンンとして向き合おうとしていた。「交際はするけど婚約はしない」、現実の計画と交流はするけど結婚を前提としないお付き合いをしていくという、有名なあのセリフは好きです。

五月女

梅棹が言った言葉ですね。万博協会ができる前の段階で、大阪府市や経済界の人たちとの会合時に言った言葉だと思います。彼は万博に関しては、ややフィクサー的な部分があると思いますね。

小松左京はブレンンというよりはブルドーザーという表現のほうが近いかもしれないと、いろんな本を読んでいて思います。パワフルではある。記録を書いて残してくれているからこそ、今に当時の記録が残っている。ブレンンという意味では、梅棹や加藤がそうですね。小松さんの立ち位置はやや2人と違っていたと思います。

奥居

小松左京は1931年生まれで、1970年で39歳。一番脂が乗っている状態の時に万博がやってきたんですね。

五月女

その5、6年前から万博の構想は動き始めていたのでその意味ではもっと若い。加藤は同じぐらいの年齢で、梅棹だけ10歳ぐらい年上。たしか1920年代生まれ。

奥居

30代40代が万博を実現にもっていったということが、千里丘陵の裏側で起きていた。大阪万博が正式に千里で開くと決まったのは1965年だったと思います。そこから5年で

開催までいくんですね。非常に時代の勢いがあったというか。もちろん、その前から根回しとかいろんなことがあったと思いますが。

豊中市立千里図書館からご紹介いただいた北大阪急行も、わずか1年半で造っちゃった。道路と一体で造ったという条件があったにしても、非常に短期間で話をつけて実現まで持っていった。しかも万博に間に合わせないといけないから、絶対に遅れることはできない。

今、箕面まで延伸工事中ですがその時と比べるとずいぶん時間がかかっている。完成は2024年春で、だいぶん姿を見せていますが。田中さんは、万博の当時から知らない世代で1つ1つ驚きの連続だと思います。

田中

そうですね。本や新聞、テレビとかで紹介される万博しか知らない世代なので、写真とかで見るとすごいインパクトがあるというかエネルギーを感じました。

奥居

私は当時小学生で覚えている世代ですが、一日中2分半間隔で電車が走ってぎゅうぎゅう詰めだったというのは本当にそのとおりで。阪急千里線も似たような感じで、万国博西口駅がありました。北千里駅周辺に住んでいたんで、万国博西口駅でどっと人が降りると一駅だけが空きでした。

北大阪急行はメインルートで、万博来場者の30%弱の人が千里中央の脇を通り抜けて、行って帰っていった。3,000万人のつもりで予測を立てていたら最終的には6,400万人来ちゃったんですからね。すごい興奮の渦に巻き込まれた千里の熱き時代ですね。

この本は豊中市立千里図書館にしかないということですが、ほぼ写真ですか？

田中

ほぼ写真で、ところどころにちょっとした説明が載っています。これと『北大阪急行25年史』をあわせて読むとすごく面白かったですね。わかりやすいので2点セットで見ただけならば。

奥居

『50年史』もありますね。

田中

はい。

奥居

『25年史』と『50年史』は南千里の千里ニュータウン情報館にもあります。ご紹介いただいた『北大阪急行電鉄の記録』は、万博輸送を無事にやりきった次の年の1971年に興奮冷めやらぬうちにまとめたもの。千里ニュータウンのアクティブな面を感じられる本だなと思います。

一方で牧瀬さんからご紹介いただいたのは、団地の住民文庫からの発信。最初のご自宅でされていたんですね。

牧瀬

そうです。最初のご自宅でしたが、狭さもあって集会所に移られ、今は UR 青山台団地の集会所でされています。

奥居

ご自宅を解放されて、子どもたちがたくさん来るだけで大変だと思います。そこから通算で 50 年続けておられる。正置さんは留学もされて、博士号も取られ、本当に絵本とともに団地、千里とともに生きてこられた有名人ですね。そういう方が続けてこられるだけのバックグラウンドがあるのが千里という町なのかなという感じがします。

子どもに良い本をたくさん読ませたい。でも部屋は狭いということで集会所に子ども向けの本を集める空間があることは千里らしい話だし、ニュータウンらしい話だなと思いますね。最初は無機質な町で自分の町だと思えないというのは、初期からお住まいの方にはそうだろうと思えるお話かと思います。

鈴木

文庫活動は図書館とは別の歴史ある活動に関心があります。『絵本という宝物』は古本屋で買いまして、読んでいるとけっこう苦勞されていますね。公民館の長としても相当苦勞された話がかかれていて、そんな中で社会教育の活動をされてこられたのは興味深いと思います。

正置さんの本は古本屋ならなんとか手に入ると思います。

奥居

千里に図書館が整備されたのは 1980 年前後…青山台文庫は 1973 年から始められていますので、千里に図書館が 1 つもなかった時代から団地の中で続けてこられた。今もやっているのはすごいですよね。

牧瀬

そうですね。50 年というのが、読み直してみてもあらためてすごいなと思いました。家庭文庫って私が採用された頃は市内で 10 いくつもあったんですけど、今は少なくなっていて青山台を含めて 3 つか 4 つぐらいに減っています。その中でも活発に活動されているのは、すごい。ちゃんと根付いているところが素晴らしいなと思います。

奥居

読み聞かせもされているんですね。

牧瀬

そうです。今は乳幼児に力を入れていて、抱っこで絵本を。

図書館もそうなんですけど、学年が上がってくるとなかなか図書館や家庭文庫に来なくなるようです。そんな中でもずっと続けておられて、図書館より古く活動されているのは本当に頭が下がります。

吹田市の千里図書館が1978年（昭和53年）に、北千里分室が1981年（昭和56年）にできています。

奥居

南千里に図書館ができた時に、貸出冊数がすごい記録を作ったというニュースがあったのを覚えています。それだけ待ち望まれていたということですよ。両館とも建て替えられて今日に至りますが、ニュータウンの文化的側面も充実してきたということですね。

一般参加者からの資料紹介

奥居

きょうは一般参加の方からも本のリストを事前にいただきましたのでご紹介します。

高橋(参加者)

近畿大学で教員をしております。鈴木先生とは同僚なんですけど、まだお目にかかったことがなくて、経営学部なので。今イギリスに留学しております、2冊とも手元にない本を挙げていますので内容をどれくらい正確に覚えているかあやふやですが。9月まで留学しているので、帰国後に本を見ながらご紹介する機会があればよいのですが。

奥居

ご紹介いただいたのが、1冊目が『オーラル・ヒストリー 多摩ニュータウン』。多摩ニュータウン開発に関わったキーパーソンへの聞き取りを収録している貴重な本です。この中の、伊藤滋先生のインタビューが面白いと。一見かたい感じの本なんですけど、中身は血湧き肉躍る話がいっぱいある本ですね。貴重な証言を取られている。万博もニュータウンもそうですが、造っていく時の葛藤の裏側にはいろんな話があるんだなと思います。

2冊目は『つながりづくりの隘路』。多摩ニュータウンと、その隣にある聖蹟桜ヶ丘という昭和30年代に開発された住宅地を取り上げていますね。

●『オーラル・ヒストリー多摩ニュータウン』細野助博・中庭光彦編著
中央大学出版部 2010
『つながりづくりの隘路』
石田光規 勁草書房 2015
→高橋さんからのご紹介

高橋(参加者)

はい。多摩ニュータウンは公的主体が関わっていますが、聖蹟桜ヶ丘は京王電鉄が沿線開発で造ったところなんです。パッと見は似ているところがあるけど、住民に調査をすると「つながりづくり」では多摩ニュータウンのほうが集会所とかがインフラとして整っている部分があるので、聖蹟桜ヶ丘よりもつながりを作りやすいという。

千里や関西のニュータウンの本をご紹介できなくて恐縮ですが、日本に戻れば研究室にいっぱいあるのでまた見てみたいと思います。

奥居

これからもよろしくお願いします。聖蹟桜ヶ丘はスタジオジブリ作品「耳をすませば」の舞台になった町ですね。一度行きましたが、ジブリファンが聖地巡礼しているところに出会いました。大変素敵な町です。

次は、京都の向島（むかいじま）ニュータウンに関わっておられる杉本先生からお願いします。

杉本(参加者)

京都文教大学の杉本です。ちょうど3月に『居心地のよい「まち」づくりへの挑戦—京都南部からの発信』を出したところですので、紹介させていただきます。多摩や千里など大きなニュータウンについての本はたくさんあってすごく勉強にもなるのですが、中規模のニュータウンも日本にはたくさんあります。そういう所の状況はあまり知られていないので、書いておかないと、記録をしておかないといけなかったと思います。

ちょっと前に「良い郊外、悪い郊外」という残酷な表現があったと思いますが、良い郊外にできたニュータウンと悪い郊外にできたニュータウンは、京都の場合は洛西ニュータウンが良い郊外で、南部の向島ニュータウンは悪い郊外という位置づけをされている。2015年に出した『京都発！ニュータウンの「夢」建てなおします—向島からの挑戦』は、他にやりようがなく「ここで暮らしていくんだ」と開き直った住民たちと学生たちが繋がって何かを始めたのが2000年の初めにあり、その時の動きをまとめています。

その後、京都市は「洛西だけではまずい」と思ったらしく、向島ニュータウンの再生をめざすビジョン推進会議を始めました。その会議は5年ぐらいありましたが、その間に住民たちはどんなことをしていたのか。2010年3月に終わるまでの動きを中心としてまとめたものです。

いわゆるベッドタウンだった所は寝る場所だけあればいい。自分の寝心地のいい居場所だけあればいいんだけど、高齢者が増えて引退してきた時にはライフタウンになる。終の住処になった時には町自体が居心地よくないと、とてもいられない。じゃあどうやって。決して豊かな人がいるわけじゃない。府営住宅が6割を占め、外国人も増えている。そこで「じゃあどうしようか」とみんなでいろんな居場所を、多世代の居場所や高齢者の居場所を作っています。そういう記録です。興味があれば、よろしくお願いします。

奥居

ありがとうございました。『京都発！ニュータウンの「夢」建てなおします—向島からの挑戦』は千里ニュータウン情報館にあります。非常に多方面に取り組みされていて、そういったニュータウンが日本中にあるんですね。

●『居心地のよい「まち」づくりへの挑戦—京都南部からの発信』杉本星子・三林真弓編 Knit-K 2023
『京都発！ニュータウンの「夢」建てなおします—向島からの挑戦』杉本星子・小林大祐・西川祐子編 昭和堂 2015
→杉本さんからのご紹介

千里だけじゃない他のニュータウンの取り組みを見ていただくと、千里にも参考になることが多いと思います。

続きましては横浜の港北ニュータウンの福富さんからたくさん本を推薦していただきました。港北ニュータウンは、新幹線の新横浜から地下鉄で10分ぐらいで行ける素敵なニュータウンです。住民が活発に活動されています。ウェブサイトもご紹介いただきました。「港北ニュータウンまちづくり資料」のデータベース (<http://kn-kk.com/shiryo/>) こんなデータベース、千里にも欲しいな思いました。

福富(参加者)

私は、横浜市18区の北のほう、川崎に近い都筑(つづき)区に住んでおります。32年前に東京の世田谷から引っ越してきたんですが、その時の都筑区の人口は3万人ぐらい。現在は22万人。どんどん人口が増えて、昔あった畑や田んぼが町になったんですが、全部を町にせず農業やみどりを残しています。緑道が15キロも続いており、コロナの時にはどんどん散歩していました。ただ最近はやな建物ができたり、問題が生じてくるので都筑区民で良い町をさらに良い町にしていこうと。悪い町になるところは避けようという活動をしている真最中です。

資料は腐るほどあります。さっき千里図書館からのお話に感激しましたが、都筑区にも都筑図書館という公共図書館、横浜市立図書館が港北ニュータウンの資料をまとめようと。港北ニュータウンコーナーがあり、現在も資料は増えています。港北ニュータウンについては任せてくださいという図書館があります。もうひとつ、20年ぐらい前に「横浜歴史博物館」ができましたが、それが都筑区にあるんです。

歴史博物館と図書館、そして港北ニュータウン記念協会。港北ニュータウンを作った人たちがその時の資料などを全部まとめて伝えていこうと「港北ニュータウン記念協会」を作って、そのホームページがさきほど紹介されたホームページです。何百冊の資料がそのままデータで読めますのでぜひご覧ください。

港北ニュータウンを作った人たち、これは金子三千男さんの本『港北ニュータウンとともに33年 私の覚書』。この中身は記録として良いと思います。

男全(おまた)富雄『失われたものの記録 望郷』は絵でニュータウン開発前の生活を描いたもの。『第三者から見た 港北ニュータウン誌』の清水浩さんは、元公団の方。公団で活動して港北ニュータウンが気に入ってそこに住んでいます。残念ながら、清水さん、金子さん、男全さんは数年前になくなられたのですが、お元気な時にいろんな話を聞いて本として残っています。

『企画展 港北ニュータウン地域の暮らし』『写真集 港北ニュータウン むかし・いまそして未来へ…』は、港北ニュータウンで企画展があった時に出た本や写真集です。

●『企画展 港北ニュータウン地域の暮らし』(財)横浜市ふるさと歴史財団 横浜市歴史博物館 1996
『失われたものの記録 望郷』男全富雄 (有)田園都市出版 1999
『第三者から見た 港北ニュータウン誌』清水浩 区画整理研究会 1998
『港北ニュータウンとともに33年 私の覚書』金子三千男 (有)田園出版社 2001
『写真集 港北ニュータウン むかし・いま そして未来へ…』協会設立20周年記念写真集刊行委員会 2002
「港北ニュータウンまちづくり資料」特定非営利活動法人港北ニュータウン記念協会
<http://kn-kk.com/shiryo/>
→福富さんからのご紹介

人口が増えて、港北ニュータウンのことを知らない子どもたちにこの町はこうやって生まれて、良いまちづくりをやっているんだと伝えていくことが大事だと。それが現在行われていることです。

金子三千男さんがなくなられた時にたくさんの資料があり、アーカイブスで残そうじゃないかと段ボール6箱を私の家に運んで、仲間といっしょにリストアップ。都筑図書館にないものは届ける予定です。また横浜歴史博物館にも相談します。

がんばってニュータウンを作られた方が高齢になって、公団の川手昭二さんもお名前のおり昭和2年の生まれ。お元気で講演もされていますが、資料がたくさん残っています。それをアーカイブスとしていかに残すかが今の大きな課題で、皆で頑張っています。

ニュータウン内にある東京都市大学の学生たちが、卒論で港北ニュータウンを取り上げた時には資料を提供しました。卒論のアーカイブスも残っています。昔からのまちづくりを記録に残すことと、次の世代に伝えていく、まちづくりの人の若返りを図っていくことに苦労しているのが港北ニュータウンの現状です。

先輩である千里や泉北がオールドタウンになった時の困り具合も、これから港北もオールドタウンになっていくので参考になるだろうから情報交換したいなと思っています。

奥居

ありがとうございました。非常に励まされるお話でした。ご紹介いただいた資料のデータベースはすごく充実している。図書館や博物館などをキーにニュータウンの足跡を記録して未来に繋げていくことは、これからも交流しながらやっていきたいと思っています。

4人目は、電話帳（笑）。この手があったかと。1975年の千里の電話帳です。

松浦(参加者)

大学の先生や、実際の現場で活動している方や専門家を前に、趣味の立場からの発言で恥ずかしいんですけども。電話帳が面白いと思ったので紹介させていただこうと。『五十音別電話帳 1975年北大阪版』、個人名がいっぱい。当時マイクロ波が中継に使われていた鉄塔の写真が懐かしい。

もう1冊は『職業別電話帳』で、お店がいっぱい載ってます。こちらも1975年です。たとえば「千里阪急ホテル」を見ると、「豊中新千里東D1号館」と書いてあるんですね。千里中央の近くに「メゾン千里」という民間のマンションがありますが、これはまちびらきの当初からあるんですがD3号棟から始まっているんです。D1とD2がなくて当時から「なんでないのか」と言われていました。この電話帳を見た時に初めて、D1号館は千里阪急ホテルのことなんだと判明して「そうなのか」と。千里の団地につけられたABCDは建物の名前ではありますが、もしかして場所に振られた名前なのかなという気もしてしまっていて、そのあたりもうちょっと調べられたらと思っています。

『職業別電話帳』には懐かしいお店がいっぱい載っています。「山里波（サンリバー）」、ご存知ですか。セルシーの屋上にあったしゃぶしゃぶ屋さん。「水車」は北千里駅の北センタービル2階にあった。桃山台駅にもあったみたいですね。この電話帳は10年以上前に、古本で見つけました。

●『大阪府五十音別電話帳
北大阪版』『大阪府職業別
電話帳 北大阪版』
電電公社 1975
→松浦さんからのご紹介

もともと電話機が好きなので、電話に関する本を古本で探すことがあるんですが、そこにニュータウンがくっついていて大喜びで買いました。

奥居

北大阪ということは、このあたりが全部？

松浦(参加者)

豊中市、吹田市、池田市の一部となっています。吹田市の一部は、大阪山田局と千里局がカバーしている吹田の部分ですね。

奥居

電話帳は、もう少し年代が下がると市町村別に分かれるんですよね。東京 23 区も全部で 3 分冊だったのが分厚くなりすぎて、23 区別に分かれたんです。

鈴木

電話帳ってすごく重要で、うろ覚えですが近隣住区論を作ったペリーもたしか電話帳を元にして。「町にどういう店がないといけないかを調べる時に、最初は電話帳だった」と書いていた気がします。今はそれができないですよね。みんな載せないから、町にどんな店があるかを調べられない。だから電話帳ってすごく大事で貴重だと思います。

奥居

新しい町を造る時に電話帳を広げて、ここに載っているものは全部町になきゃいけないんだ、と言ったという逸話を聞いた覚えがあります。また面白い電話帳があれば確保しておいてください（笑）。図書館に電話帳ってあるんでしょうか？

牧瀬

吹田市は中央図書館に行かないと見られないのですが、「千里ニュータウン電話番号名簿」というものがあります。電電公社じゃなくて千里タイムズが出していたもの。1976 年版を、吹田市では中央図書館で見ることができます。「職業別電話帳」があれば楽しいのですが、残念ながらこの名簿は個人を扱っています。

奥居

90 年代ぐらいまでは町の様子を電話帳で追跡できると思うんですが、今世紀に入ると掲載が選択制になった。固定電話を置かない家も増えてきて、家庭でも電話帳を置かなくなっていますね。

牧瀬

図書館では、分担して保存しておりますが、古いものもちゃんと持っておけばよかったですと思います。

奥居

大変面白い視点をありがとうございます。

それでは5人目の方へ。すごくたくさん推薦いただきました。

加福(参加者)

たくさん書き連ねましたが全部、豊中市立千里図書館にありました。吹田にもあるんじゃないかと思います。

1冊目は、山本茂さんの『ニュータウン再生』。非常に真面目な本ですが、残念ながらこの本を出された後になくなりました。千里についての労作だと思います。

2冊目は、西川祐子さんの『住まいと家族をめぐる物語—男の家、女の家、性別のない部屋—』。千里コラボができた頃に西川先生をお招きしてお話を聞きました。西川さんと杉本さんで書いておられます。印象に残ったのは「ニュータウンに歴史がないというイメージは間違っている。ニュータウンには住民一人一人の生きてきた歴史が重層した壮大な歴史が渦巻いているんだ。そのうえに新しいニュータウン時間が重ねられて歴史が続いていくんだ」という文章です。なるほど、そういう観点で。ただ建物だけを見てはニュータウンの歴史を感じることはできないんだなど、お2人がおっしゃっていることが印象に残りました。

次は、同人誌の『千里眼』。梅棹忠夫先生の発明で「書きたい人のための文章のカラオケだ」と。自分でお金を払って書くんです。そこから単行本になった原稿もあります。

次に、2022年11月にNHK大阪「ほっと関西」で、千里ニュータウン60周年の千里祭りを取り上げていましたが、その内容をWeb記事として文章化し、残してくれています。こういう残し方もあるんだと思いました。

ほかに、日経新聞「私の履歴書」では、小松左京が書かれた回に、万博と千里のことが出ておりました。田辺聖子『すべってころんで』は、全編が千里を舞台にした小説です。1972年に朝日新聞で連載されていたもの。主人公がちょっと旅行しますが、全編が千里という小説はほかにはあまりありません。

●『ニュータウン再生』山本茂 学芸出版社
2009(今回展示)

『住まいと家族をめぐる物語—男の家、女の家、性別のない部屋—』西川祐子 集英社
新書 2004(今回展示)

<https://www.jutaku-sumai.jp/p042.html>

『千里眼』千里文化財団(年4回発行)

『千里ぐらし』梅棹忠夫 講談社 1990(今回
展示)

『樫の木公園』吉山文雄 創元社 1990

『私だけの放送史』辻一郎 清流出版 2008

『すべってころんで』田辺聖子 中公文庫
1978 (今回展示)

『市民活動はじまりの物語—コラボの歴史を
振り返ってこれからの活動を考えよう—』吹
田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議
2015

[https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/
senrikorabo/ayumi/10517144532448.files/f
orum2.pdf](https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/senrikorabo/ayumi/10517144532448.files/forum2.pdf)

『街角広場アーカイブ'07』千里グッズの会
2007

『行為と妄想』梅棹忠夫 中公文庫 2002

『小松左京自伝—実存を求めて—』小松左
京 日本経済新聞出版社 2008

「千里ニュータウン」で会社員が始めたこと
日本放送協会 2022

[https://www3.nhk.or.jp/news/html/202211
18/k10013894921000.html](https://www3.nhk.or.jp/news/html/20221118/k10013894921000.html)

→加福さんからのご紹介

奥居

たくさん紹介していただき、ありがとうございました。

皆様から本当にたくさんのバラエティに富んだ資料を紹介いただき、ありがとうございます。きょうは遅い時間からのご参加ありがとうございました。今後とも資料の探索を通じたニュータウンの交流を続けていきたいと思ひますし、ニュータウンの文化、暮らしを掘っていくことを続けていければと思ひています。

ただいま南千里駅前の吹田市立千里ニュータウン情報館では「ニュータウンを読む」という資料の企画展示を3月26日まで行っております。ニュータウンや、そのルーツである田園都市の読む資料を集めています。実際に手にとって読んでいただけますので、是非お越しください。

吹田市立千里ニュータウン情報館や南千里、北千里、千里中央にある図書館には、ニュータウンに関する資料がたくさんあります。地元ならではの情報もあると思ひますので、ぜひ足を運んでご自分の興味を深めていただければと思ひます。ただ千里ニュータウン情報館では図書の貸出は行っていません。じっくり読みたい方は図書館でお願いします。

あっという間に2時間近く経ってしまいました。知れば知るほど面白くなるニュータウンということで、きょうは海外からもご参加いただきありがとうございました。本をご紹介くださった4名の方にあらためてお礼を申し上げます。これからもニュータウンについて掘り下げながら、また交流も広めながら、ニュータウンへの関心を広げていただければ企画した者としては光栄です。遅くまで、ありがとうございました。

主催：吹田市立千里ニュータウン情報館
運営企画：一般財団法人 千里パブリックデザイン
後援：吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議
文字起こし：AKIRA text create 山本晶

「ニュータウンを読む」展展示ブックリスト

2023年2月7日～3月26日

吹田市立千里ニュータウン情報館

- ・千里ニュータウンを中心に、ニュータウン、都市開発全般からも選んでいます。
- ・これらの資料は、今回の展示のために収集し、常時「千里ニュータウン情報館」にないものも含まれています（「千里ニュータウン情報館」では貸出は行っていません）。
- ・一方で、千里ニュータウンやニュータウンに関する「読む資料」は、はてしなく大量にあり、ここに挙げたのは、ごくごく一部です！
- ・「吹田市立千里ニュータウン情報館」「吹田市立千里図書館」「吹田市立北千里図書館」「豊中市立千里図書館」などに多数所蔵がありますので、ぜひとも探索して、「わたしたちの町」ニュータウンへの関心を広げてください！

1. 『明日の田園都市』エベネザー・ハワード 1898
2. 『近隣住区論』クラレンス・A・ペリー 1929
3. 『ちいさいおうち』バージニア・リー・バートン 1942
4. 『千里ニュータウンの建設』大阪府 1970
5. 『華麗なる一族』山崎豊子 1970～72
6. 『すべてころんで』田辺聖子 1972
7. 『千里ニュータウン 人と生活』大阪府千里センター 1973
8. 『千里ニュータウンの研究』片寄俊秀 1979
9. 『羊をめぐる冒険』村上春樹 1982
10. 『千里の歴史と伝統』千里20年まつり実行委員会 1982
11. 『千里ぐらし』梅棹忠夫 1990
12. 『水曜の朝、午前三時』蓮見圭一 2001
13. 『新しき故郷』山地英雄 2002
14. 『住まいと家族をめぐる物語』西川祐子 2004
15. 『ニュータウン再生』山本茂 2009
16. 『海に沈んだ町』三崎亜記 2011
17. 『しろいろの街の、その骨の体温の』村田沙耶香 2012
18. 『団地図解』篠沢健太、吉永健一 2017
19. 『季刊民族学 161 「千里から考えるニュータウンとそのゆくえ」』千里文化財団 2017
20. 『ニュータウン誕生』パルテノン多摩、吹田市立博物館 2018
21. 『ここじゃない世界に行きたかった』塩谷舞 2021

22. 『千里山タイムス』『千里タイムズ』千里タイムズ社 1962～
23. 『新聞千里』大阪府千里センター 1964～2005

以上